

III. アブ・シール南丘陵遺跡第 22 次調査概要

1. 発掘調査概要

(1) はじめに

アブ・シール南丘陵遺跡調査では、2008 年の第 17 次調査において、丘陵頂部の発掘調査を再開し、カエムワセトの石造建造物から北北東に約 40m の地点にて、新王国時代第 19 王朝に年代づけられるトゥーム・チャペルを発見した（吉村他 2009）。続く 2009 年の第 18 次調査において、トゥーム・チャペルの北西から地下埋葬室を発見し、内部から「高貴な女性」の称号を持つイシスネフェルトの石棺を発見した。埋葬室の位置はトゥーム・チャペルのピラミッドの真下に位置しており、埋葬室の出土遺物の年代もトゥーム・チャペルの年代に矛盾しないことなどから、トゥーム・チャペルはイシスネフェルトに帰属するものと判断された（吉村他 2010; 河合 2010）。更に、同年の第 19 次調査において、トゥーム・チャペルの背後にあるピラミッドから約 10m の位置で、葬送儀礼に使用された土器を納めたピットが出土した。その位置や土器の年代などから、イシスネフェルトの埋葬に関係する遺構であると判断された（吉村他 2010: 49-59）。また第 19 次調査では、今後の調査の計画の策定に向け、周辺の遺構の有無を明らかにすることを目的として、丘陵頂部および丘陵斜面、周辺において、地中レーダー探査を実施した（岸田他 2011）。

2011 年の 1 月末から第 20 次調査を開始したが、エジプト革命のために一時、調査を中断した。第 21 次調査として実施した 2011 年 8 月の倉庫での整理作業を経て、2012 年 8 月に第 22 次調査として、アブ・シール南丘陵遺跡での発掘調査を再開した。第 22 次調査では、第 19 次調査で実施した地中レーダーの異常応答地点を発掘し、埋蔵遺構の有無を明らかにすることを主な目的とした。

(2) 発掘調査

①丘陵頂部

第 19 次調査の地中レーダー探査において、イシスネフェルトのトゥーム・チャペルの西側（8B, 10B グリッド）において、2 か所の異常応答が確認された（岸田他 2011: 102, Figs.3, 4）。今年度の調査でその異常応答があった地点の発掘を行い、応答の原因を明らかにするとともに、遺構の有無を確認した。発掘調査の範囲は、南北 20m × 東西 5m である（Figs.9, 10）。

発掘調査の結果、南側の異常応答の地点からは石灰岩製ブロックが発見された。おそらくカエムワセトの石造建造物に由来すると考えられる。また、北側の異常応答の地点からは、遺構や遺物などは発見されなかった。

②丘陵南東斜面

アブ・シール南丘陵遺跡では、これまでに丘陵南東斜面から 2 基の岩窟遺構（AKT01, 02）が発見されている。第 19 次調査では、丘陵南東側斜面における同様の岩窟遺構の存在の確認を目的とし、幅 20m、長さ 50m の範囲で地中レーダー探査を実施した（岸田他 2011: 103-107）。探査の結果、地表からの深度約 1 ~ 1.5m において、岩盤層が途切れており、人為的に岩盤を掘り込んだ遺構が存在する可能性が示唆された。更に、異常応答の三次元分布図から、この岩盤の途切れた範囲が約 10m × 10m の方形を呈していると推定された（岸田他

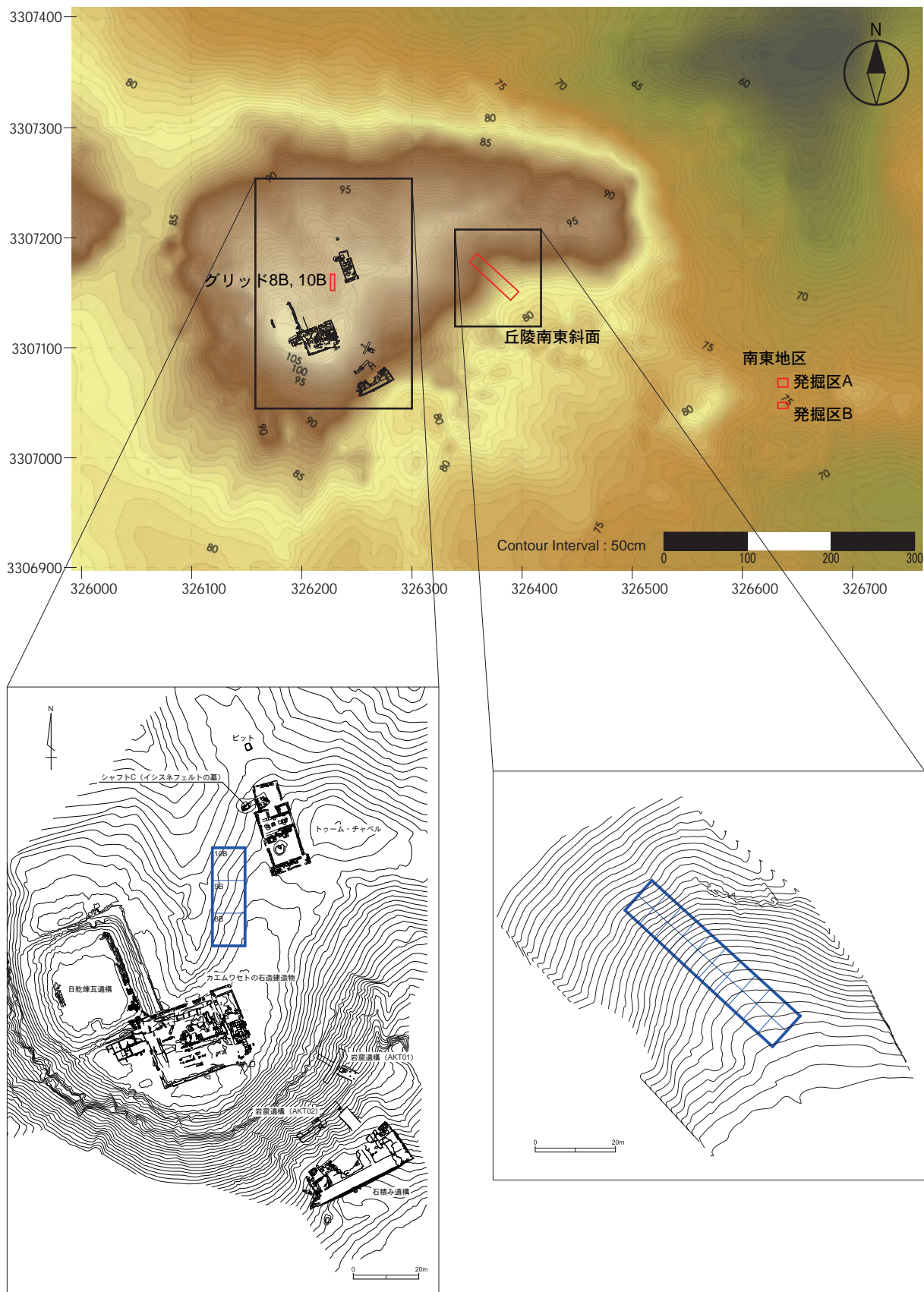


Fig.9 アブ・シール南丘陵遺跡第22次調査発掘区



Fig.10 丘陵頂部（8B, 10B グリッド）発掘調査終了後（南より）

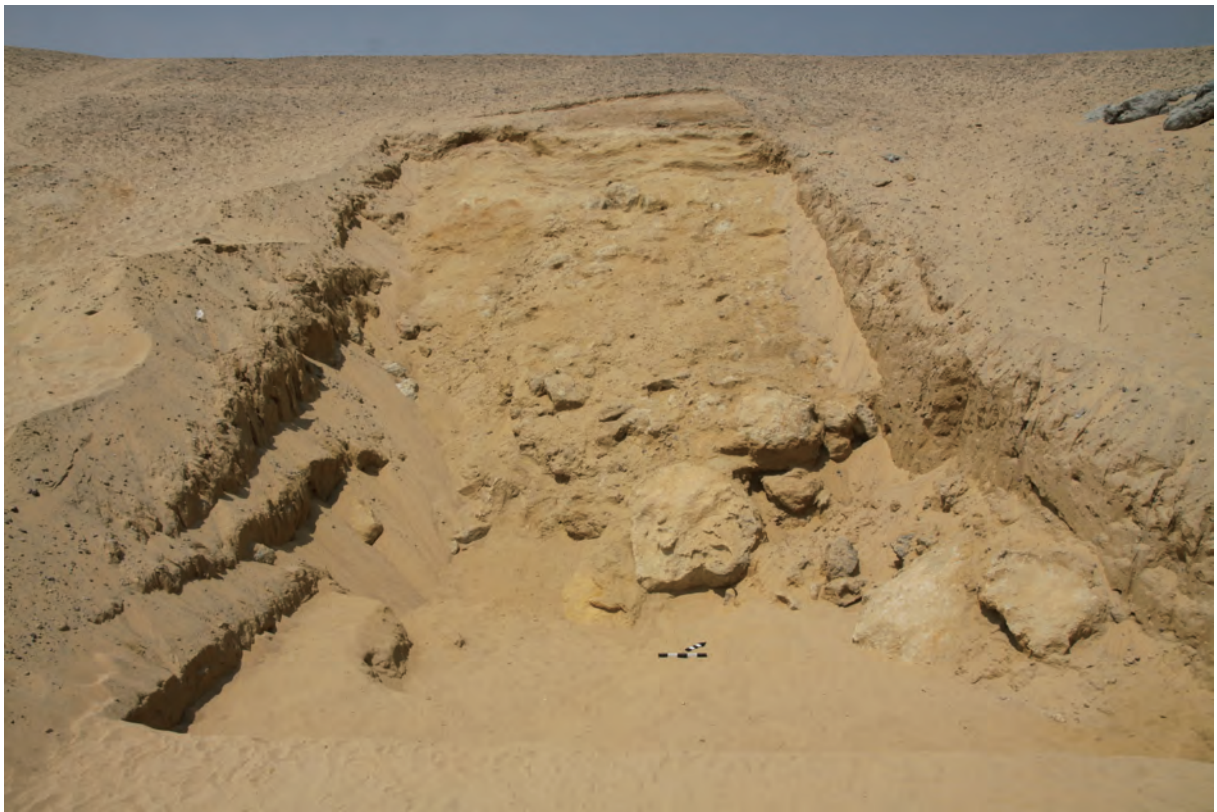
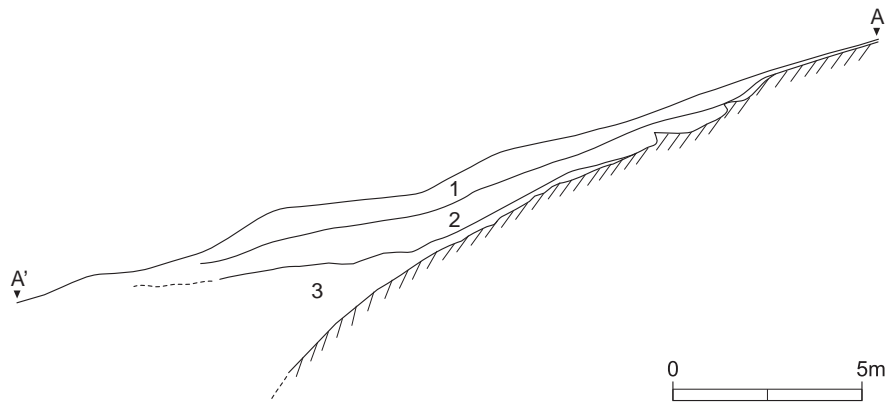


Fig.11 丘陵南東斜面発掘調査終了後（南東より）



- 1 黄色砂礫層①：φ1cm～10cm程度の礫を多く含む黄色の砂層
- 2 黄色砂礫層②：1に比べ礫の相対量が少ない黄色の砂主体の層
- 3 黄色細砂層：細かい砂で構成される風成の砂層

Fig.12 丘陵南東斜面セクション図

2011: 103, Figs.8, 9)。この結果を受けて、第22次調査では、地中レーダー探査を行った範囲に南北50m×東西10mの発掘区を設定し、発掘調査を実施した (Figs.9, 11)。

発掘調査の結果、発掘区から遺構は発見されず、南東斜面の地中レーダー探査の岩盤の不連続と異常応答は、自然地形によるものであることが確認された。発掘区は自然に生み出された急峻な谷状地形にあたり、中でも岩盤の不連続として認められた箇所は、その谷状地形がほぼ垂直に下る地点であったことが明らかとなった。

発掘調査の過程では、岩盤直上から原位置で古王国時代に年代づけられる土器が発見された。また、上層の黄色砂礫層②からも、廃棄された状態で新王国時代第18王朝中期に年代づけられる土器群が発見されている (Fig.12)。その他、石製容器片、植物遺存体、末期王朝時代に年代づけられるシャブティ、アミュレットなどが出土しており、丘陵における活動を解明するための新たな資料が得られた。

③南東地区

アブ・シール南丘陵から東南東の方角、約450mの地点では、以前から人工衛星画像や踏査によってクレーター状の窪みが複数視認されており、何らかの遺構が存在していると想定されていた。また、この一帯にだけ珪質砂岩片¹⁾が散乱している点も、特徴的であった (cf. 恵多谷、長谷川 2011: 82, Fig.1)。こうした点を受けて、第19次調査では、この窪みについても地中レーダー探査を行った。その結果、南北に3つ並んだ窪みのうち、南と北の2つについて、岩盤が人為的に掘削されたシャフト状の遺構である可能性が示唆された (岸田他 2011: 103, Figs.10-12)。

アブ・シール南丘陵遺跡の調査では、これまで丘陵頂部と斜面、裾部を中心に発掘調査を実施してきたが、第22次調査では、このクレーター状の窪みがある一帯を新たに南東地区として発掘調査の対象とした。中でも、地中レーダー探査によってシャフトである可能性が示唆された南北に連なる3つの窪みの内、北側を発掘区A、南側を発掘区Bと呼称し、発掘調査を行った (Figs.9, 13, 14, 17)。

1) 発掘区A

3つのクレーター状の窪みのうち、最も北に位置する窪みを中心として、発掘区A (12.5m×12.5m) を設けた。発掘調査の結果、発掘区Aのほぼ中央から、東西約1m、南北約1.2m、深さ約3.3mの規模のシャフトが発

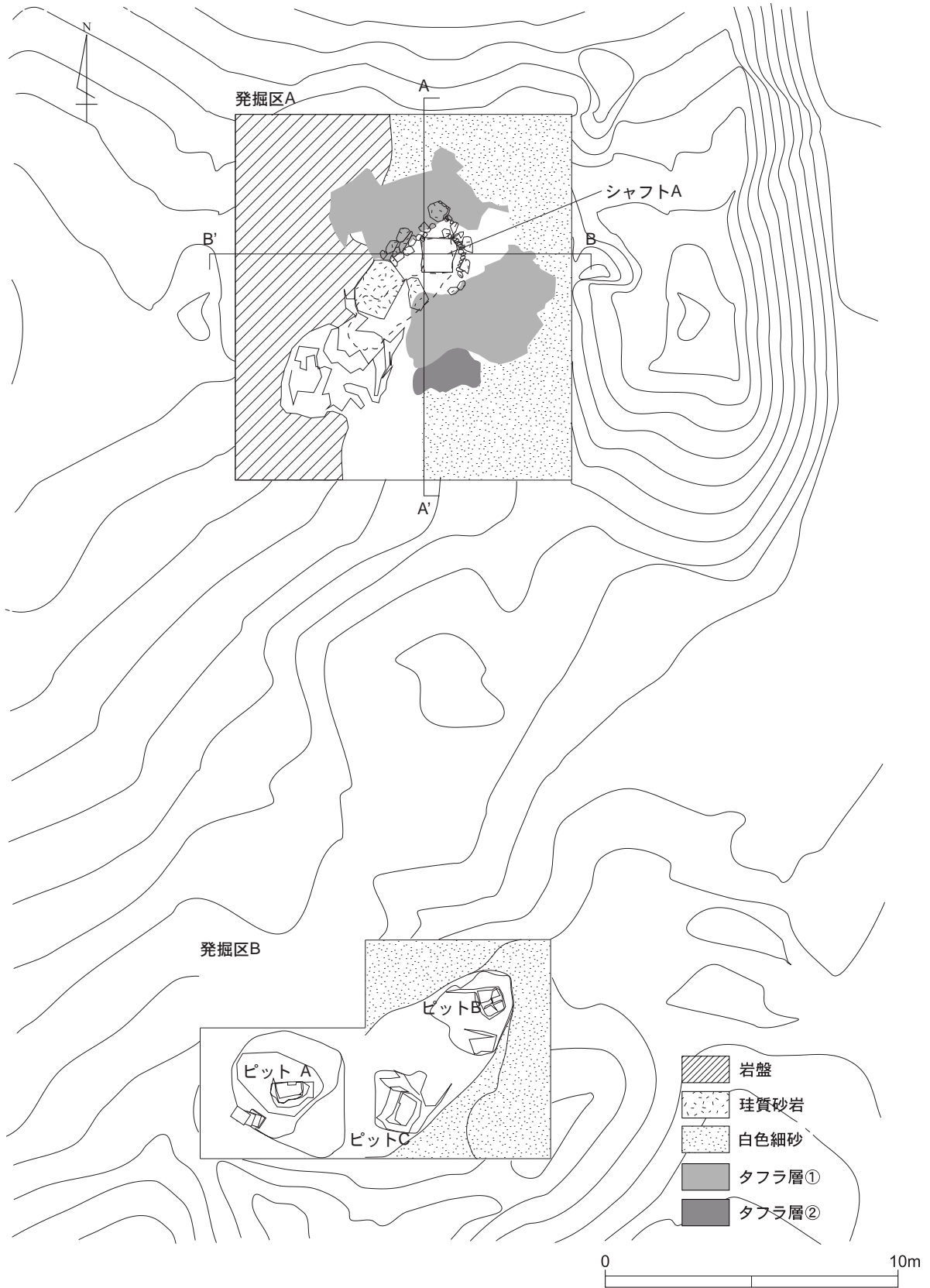


Fig.13 南東地区第22次調査発掘区



Fig.14 発掘区 A 発掘調査終了後（東より）



Fig.15 シャフト A（南東より）

見された (Figs.13-15, 21)。シャフトは地上から約 60cm まで岩盤層を掘削しており、そこから下はタフラ層を掘削していた。シャフトの底は約 1.2m × 1.2m のほぼ正方形に掘られており、南側半分だけが約 25cm の深さに掘込まれた状態であった。こうした点から、シャフトの掘削は途中で中止されたと考えられる。また、地上から約 2m の部分では、南西方向に向かって横穴が掘削されていた。横穴はタフラ層を掘削したもので、矩形に整形されておらず、ドーム状の部屋で構成されていた。シャフトや横穴内部には、自然に堆積したと考えられる黄色の細砂が表層から続いて堆積しており、また年代や埋葬の痕跡を示す遺物は発見されていない。こうしたことから、シャフトは盗掘などによりすでに一度、空けられたと考えられる。

シャフト周辺部では、シャフトを掘削した際に形成されたと考えられるタフラ層の掘削排土が円環状に 2 層堆積していた。シャフト周囲の堆積は、岩盤上から灰色砂層、黄色砂層、タフラ層、黄色砂層、タフラ層、表層の黄色砂層となっている (Fig.16)。2 層のタフラ層の間には自然堆積と考えられる黄色細砂層があり、ここから少なくとも 2 回にわたってシャフトにおけるタフラ層の掘削が行われたと考えられる。また、シャフト周囲の円環状のタフラ層には、それらのタフラがシャフト内に流れ込むのを防ぐような状態で珪質砂岩片と石灰岩片が配置されており、そこからこれらの石材が土留めの役割を担っていた可能性が考えられる。シャフトの周辺の土留めとして機能したと考えられる珪質砂岩の角には、台形を呈した楔の痕跡があり、楔の形状からローマ時代に特徴的な楔によるものと推測される (Heldal and Storemyr 2007: 117-121, Fig.50)。

また、発掘区 A の南西部では、石灰岩の岩盤が自然の段差あるいは人為的に掘削によって窪んでいた。その南西隅の約 4m × 3m の範囲では、火を受けた珪質砂岩片と炭化物を多量に含む灰色の層が岩盤直上から約 80cm、集中して堆積しており、付近において珪質砂岩を火を用いて掘削あるいは加工する活動が行われていたと考えられる²⁾。この灰色の層は、シャフトの周囲でも岩盤直上から確認されており、この地区における最も古い活動に位置づけられる。

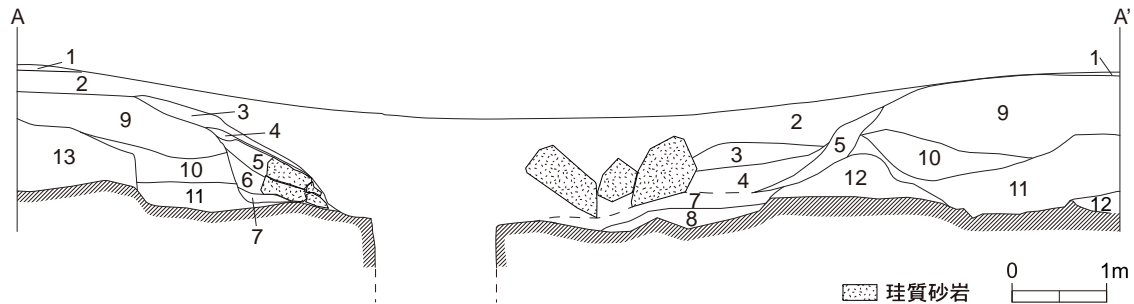
大量に発見された珪質砂岩片について、これまで周辺において珪質砂岩の採石場は知られておらず、メンフィス・ネクロポリス周辺ではゲベル・アル＝アハマルの珪質砂岩の採石場が確認されているのみである (Klemm and Klemm 1993: 216-219)。当該地区の珪質砂岩が、同地由来のもので持ち込まれたものか、あるいは周辺の未知の珪質砂岩の採石場に由来するものかは不明であり、今後周辺の遺跡との関係の中で考察される必要がある。

発掘区 A では、土器片、植物遺存体、珪質砂岩製のハンマーストーンなどが発見されているが、出土遺物の量は少ない。岩盤直上から発見された古王国時代の土器片や上層の末期王朝時代の土器片などが、当該地区における活動の年代を示すものとなっているのみである。

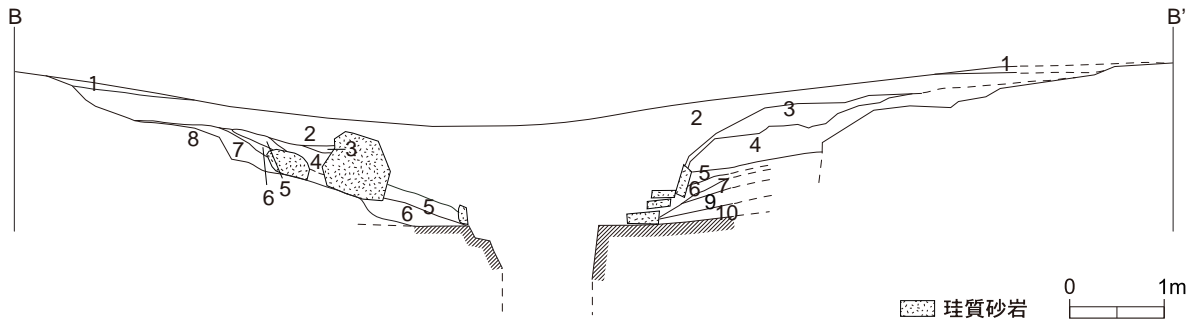
2) 発掘区 B

3 つのクレーター状の窪みのうち、最も南に位置する窪みを中心として、発掘区 B (7.5m × 12.5m) を設定し、発掘調査を行った (Figs.13, 17)。発掘区 A と同様に地中レーダー探査によって地層の断絶が確認されていた場所である。

調査の結果、3 つの矩形の掘り込みが発見され、発見順にピット A、ピット B、ピット C と命名された (Figs.18-20, 22-24)。いずれのピットも一辺が約 70cm ~ 1m、深さ約 40cm ~ 1m の小規模のもので、更に深く掘り下げようとした痕跡はあるものの、未完成で掘削は終了している。いずれのピット内部にも自然堆積と考えられる風成の黄色の砂層が表層から続いており、シャフト A と同じようにすでに一度、盗掘などの被害を受けていると考えられる。これらのピットの周囲には、石灰岩や珪質砂岩を利用した簡易的な石積みが築かれていた。ただし、これらの石積みが掘削に伴うものであるのか、あるいは後世の盗掘などに伴うものであるのかは不明である。



- 1 黄色砂礫層：礫（φ1cm～10cm程度）と珪質砂岩片を多量に含む。
- 2 黄色細砂層①：風成堆積。しまりなし。混じりけのないφ0.1mm以下の砂。
- 3 タフラ層①：タフラで構成される。タフラを掘削した際の排土。
- 4 黄色細砂層②：風成堆積。しまりなし。
- 5 タフラ層②：タフラで構成される。タフラを掘削した際の排土。
- 6 黄色細砂層③：タフラを含む。しまりあり。
- 7 黄色細砂層④：風成堆積。しまりなし。
- 8 灰色砂層①：礫（φ1cm～5cm）、少量のタフラを含む灰色の砂層。非常にしまりが強い。
- 9 黄色細砂層⑤：黄色細砂で構成されているが、しまりが強い。
- 10 灰色砂層②：炭化物を中量含む。珪岩（φ1cm～15cm）を多量に含む。
- 11 灰色砂層③：炭化物を多量に含む。岩盤直上に堆積しており、直上付近では珪質砂岩片を伴う。
- 12 白色砂層：φ0.5mm程度の白色砂粒で構成される地山層。
- 13 灰色砂層④：珪質砂岩を含まず。しまりあり。



- 1 黄色砂礫層：礫（φ1cm～10cm程度）と珪質砂岩片を多量に含む。
- 2 黄色細砂層①：風成堆積。しまりなし。混じりけのないφ0.1mm以下の砂。
- 3 灰色砂層④：A地区東西セクションにのみ現れている灰色の砂層。他の灰色砂層との関係は不明。
- 4 黄色細砂層①：風成堆積。しまりなし。第2層と同じ層。
- 5 タフラ層①：タフラで構成される。タフラを掘削した際の排土。
- 6 黄色細砂層②：風成堆積。しまりなし。
- 7 タフラ層②：タフラで構成される。タフラを掘削した際の排土。
- 8 白色砂層：φ0.5mm程度の白色砂粒で構成される地山層。
- 9 黄色細砂層⑤：黄色細砂で構成されているが、しまりが強い。
- 10 灰色砂層①：礫（φ1cm～5cm）、少量のタフラを含む灰色の砂層。非常にしまりが強い。

Fig.16 南東地区発掘区 A セクション図



Fig.17 発掘区B発掘調査終了後（北より）

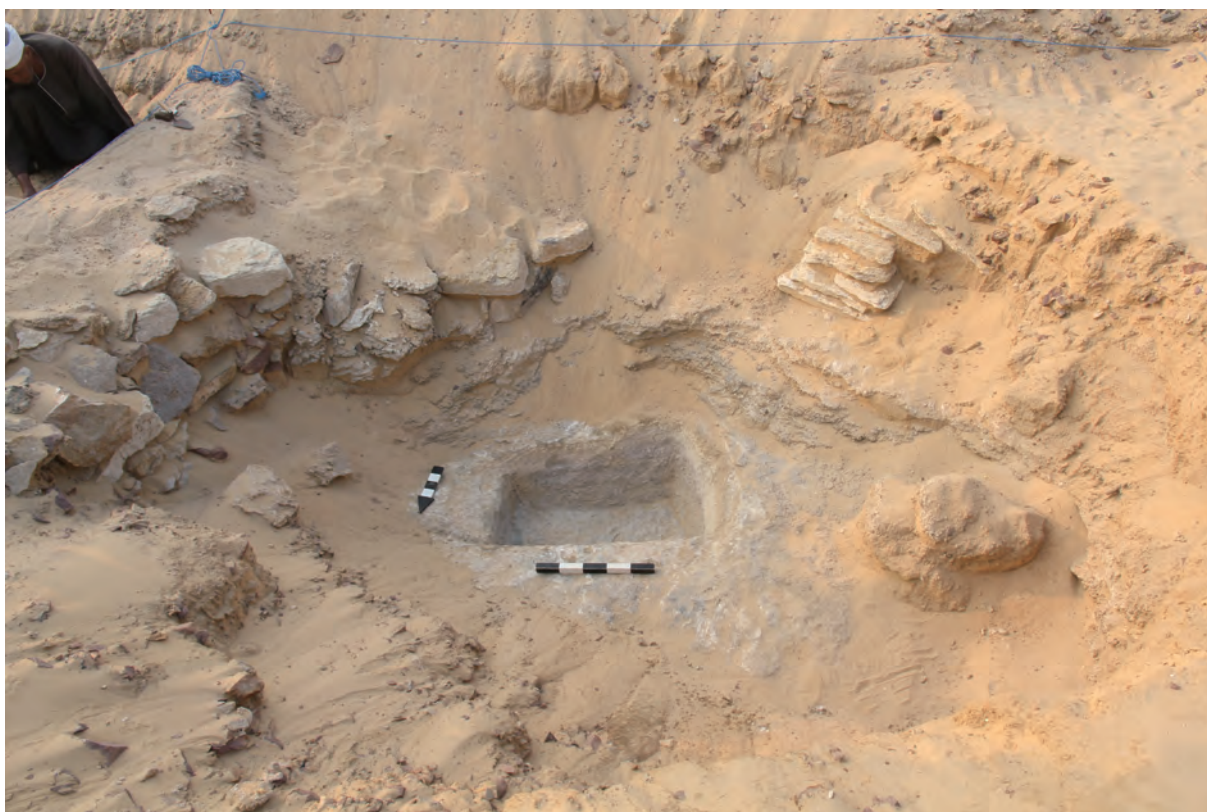


Fig.18 ピットA（北より）



Fig.19 ピットB (西より)



Fig.20 ピットC (北より)

発掘区 B から、出土遺物の量は少なく、両面に格子状の掘込みのある板状の石灰岩片、ファイアンス製品片、カルトナージュ片などが出土しているものの、明確に年代や活動の痕跡を示すような遺物は発見されなかった。

(3) 出土遺構

①発掘区 A のシャフト A (Figs.13-15, 21)

発掘を行った南東地区は、丘陵頂部から緩やかに下る傾斜地が、南北に走る大きな潤谷と出会う場所にあたる。傾斜地の先端は潤谷の河岸段丘のような地形をつくり、石灰岩の岩盤が崖状の露頭となって現れている。シャフト A は、この「崖」の東側、1.2m ほど下がった固い岩盤層に穿たれていた。「崖」はシャフト A の掘削排土を含む土砂に広く覆われ、この段差が自然に生じたのか、あるいは石灰岩が人為的に採取されて形成されたかについてははっきりしない。

シャフト A の周囲には、石積みとタフラ層などからなる厚い堆積がシャフトを取り囲むように広がっていた。タフラ層はシャフト A の掘削で生じた土砂の可能性が高く、石積みの一部はこのタフラ層を積みながら築き上げたことが確認された。掘削排土の土留めとして石積みが機能していたと推察される。

石積みは、石灰岩や赤褐色の珪質砂岩の破片で作られた粗い空積みで、整形された石材は含まれていなかった。赤褐色の珪質砂岩が多数を占め、シャフトの南西には同質の巨石も残されていた。この巨石の角には横幅 14～17cm、深さ 5cm の矢穴が一行に残されており、浅く、幅の広い矢で石を割り出したと推測される。同様の矢穴が残る石材はシャフト周囲の石積みの中にもあり、先の岩盤面に近いタフラ層に密着した状態で据えられていた。矢を用いて固い石を割る手法は王朝時代には行われなかったと考えられ、この石積みがシャフト A の掘削排土の土留めであるならば、遺構の造営時期を考える手がかりとして重要である。

同様の赤褐色の珪質砂岩は当該発掘区の表層に多数散乱しており、発掘時に除去した堆積からもおびただしい数の石片が発見された。大型の石材も含まれ、その総量は膨大と見積られるが、いずれも未整形の破片であり、加工された痕跡は発見されなかった。このためどのような利用の結果、破片がこの一帯に集中したのかについては分かっておらず、周辺地域を含めた包括的な検討が必要である。

シャフト A が穿たれた岩盤上面とシャフトの壁面には、砂を多く含む石灰モルタル状の付着が確認され、また同様の痕跡はシャフト A の南西に残された珪質砂岩の巨石やその周囲にも広く認められた。これが人為的な活動に伴う痕跡であるかは不明であるが、少なくともシャフトの蓋石に相当する石材や上部構造の痕跡は、発掘した範囲から確認することはできなかった。

シャフトは岩盤の亀裂を利用しながら概ね矩形に掘り進められ、各面は地軸の方位とほぼ揃っていた。シャフトの東面では岩盤の掘り残しが見られたため計画していた規模を知ることは困難であったが、厚さ約 60cm の岩盤下に広がる粘土質のタフラ層では、南北約 1.2m、東西約 1m の平面を示していた。シャフトの深さは岩盤面から約 3.3m に及び、途中 2m の位置に横穴が穿たれていた。横穴はシャフトの南西隅からほぼ 45 度の角度で南西方向に真っ直ぐ伸びており、シャフトからの奥行きは約 3.6m、空間の幅は約 1m、高さは約 1m であった。部屋の奥の西壁には横幅約 85cm、高さ約 80cm、奥行き約 40cm のニッチ（壁龕）が作られていた。

壁面は粗く削られており、装飾のたぐいは確認できなかった。また、シャフトと横穴の境に仕切りや封鎖壁などが築かれた痕も確認できなかった。奥に長い形状やニッチの存在から判断し、横穴は遺体と副葬品を収めるための埋葬室として計画された可能性が高いが、内部に遺物はなく、周囲からも埋葬の詳細を示す遺物は発見されなかった。そのため、この横穴の空間がどの時期に穿たれたかは不明である。

横穴の反対側にあたるシャフトの北東隅には壁を 20cm ほどえぐり取った痕が観察された。内部に棺を収め

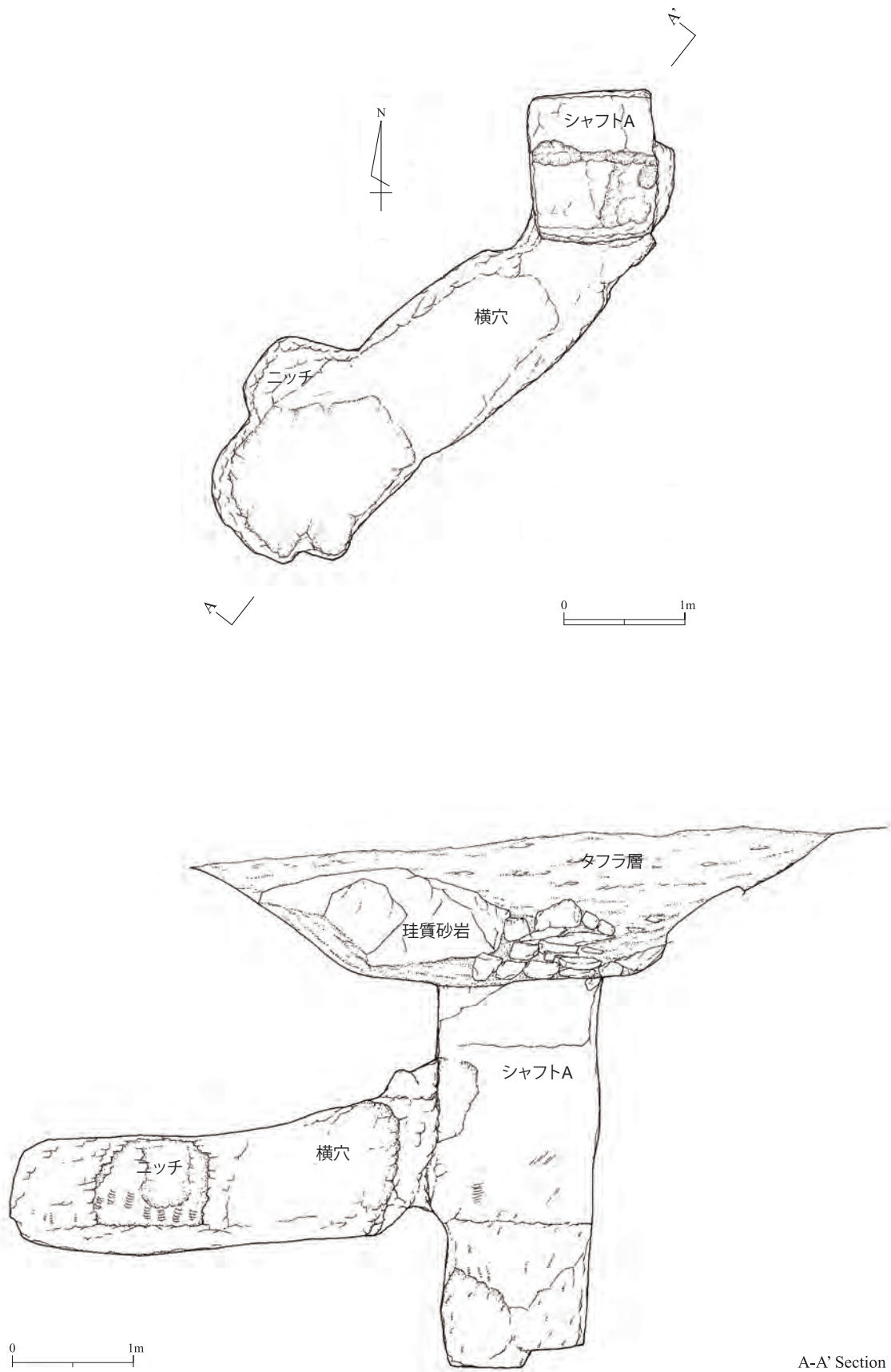


Fig.21 シャフト A 平面図、断面図

A-A' Section

る際に削った窪みと考えるならば、横穴は埋葬室として実際に利用された可能性が高いといえよう。また横穴の軸線がシャフトのそれと明らかに異なっていることから、両者が異なる計画に基づいて掘削された可能性も高く、別の言い方をすれば既にあったシャフトを利用して横穴が穿たれた、とみなすことができよう。

一方、シャフトはさらに 1.1m ほどまっすぐに掘り下げられ、その最下面は南側半分が北側よりも約 25cm 低い、段をなしていた。シャフトの下面を半分ずつ交互に掘り下げる工法が採られていたと考えられ、シャフトは掘削途中で作業が放棄されたと推測される。ここで考えるべきは、未完で終わったシャフトの掘削と、横穴の掘削との前後関係であろう。シャフトを詳しく観察すると、横穴の下面よりもやや下あたりの高さから、シャフトの平面規模が拡張し、壁面に残る鑿痕も上方と異なっていた。すなわち、シャフトの掘削は横穴が穿たれた辺りを境に上下で異なっており、シャフトは少なくとも 2 回の工程によって掘削された可能性が高い。このように横穴を含めたシャフト A の掘削はやや複雑な様相を示しており、かつ内部から造営年代を示す遺物が発見されなかったために一連の工程を描くことが難しい状況にある。遺構の状態を整理すると、深さ 2m ほどのシャフトがまず掘削され、次にその底面付近に長軸を 45 度振った横穴が掘られ、さらにシャフトが 1m 強掘り下げられた、という順序が、もっとも蓋然性の高い考え方として提示できよう。ただし、それら全てが異なる計画に基づく、転用、拡張であるのか、あるいは計画の変更を含みつつも一連の工程と見なしうるのかについては、今回の発掘調査の範囲では結論に至らなかった。

シャフト A の周囲に堆積している掘削排土の層位数や内容物などを詳しく調査するとともに、周辺遺構における赤褐色の珪質砂岩の使用例などを包括的に検討されることが望まれる。

②発掘区 B のピット

発掘区 B からは、3 つの浅いピットが出土し、発見順にピット A、ピット B、ピット C と命名された。

ピット A は最も西側に位置し、東西に長い矩形平面をしていた (Figs.13, 17, 18, 22)。ピット A は平坦で固い岩盤に穿たれ、ピットの周囲は、西側から南側にかけて脆弱な岩盤層が 50cm ほど高く残されていた。一方、ピットの北側から東側には砂が厚く堆積し、ピットを取り囲むような空積みの簡便な石積みも築かれていたが、ピットの掘削に伴う石積みであるのかは不明であった。

ピット A の平面規模は、岩盤面で東西約 96cm、南北約 70cm、底面で東西約 80cm、南北約 54cm と計測され、深さは約 40cm であった。北側の面は、岩盤の亀裂を利用しながら掘り進められ、底面には岩盤面に沿ってさらに掘り下げようとした痕も観察された。

ピット B は発掘区の北東から発見され、広さ 2m 四方の平坦な岩盤の北東隅に穿たれていた (Figs.13, 17, 19, 23)。一辺約 90cm の方形平面をし、深さは 60～87cm であった。底面は南から北に下る三段の階段状をなし、おのおの「段」の中央にはこれを二分するように溝が刻まれていた。これらの痕跡は掘削の工程を示していると考えられ、ピット B はこの平面規模でさらに深く掘り下げる計画であったと推測される。

ピット C はピット A、B の中間に位置し、それぞれ 4m ほど離れていた (Figs.13, 17, 20, 24)。ピットは南北に長い矩形平面をし、岩盤面で南北 118cm、東西 66cm、深さは 1m ほどで下面は平坦に削られていた。南北および東側の 3 側面は岩盤上面からほぼ鉛直に切り出されていたが、西側はピットの南北幅で、岩盤を階段状に粗く削った状態であった。

3 つのピットはその規模や深さに類似性が窺われ、互いに何らかの関係を持つ遺構であった可能性が高いが、いずれも内部からその機能を示す遺物が検出されなかったため、現在までのところ用途は不明である。

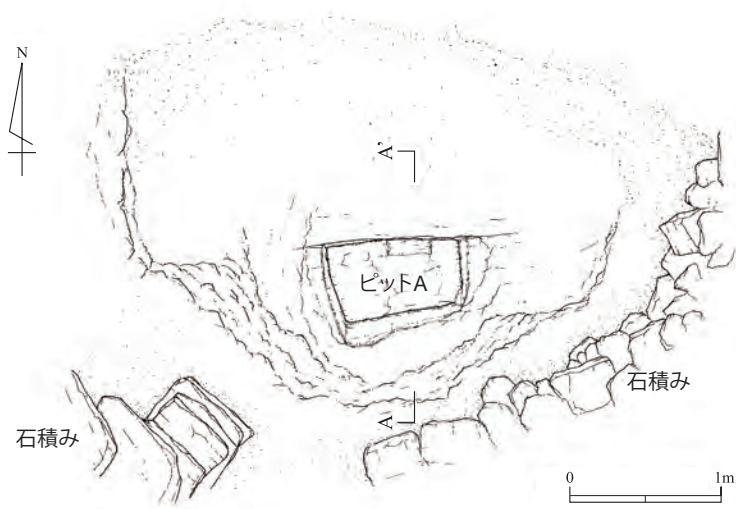


Fig.22 ピットA 平面図、断面図

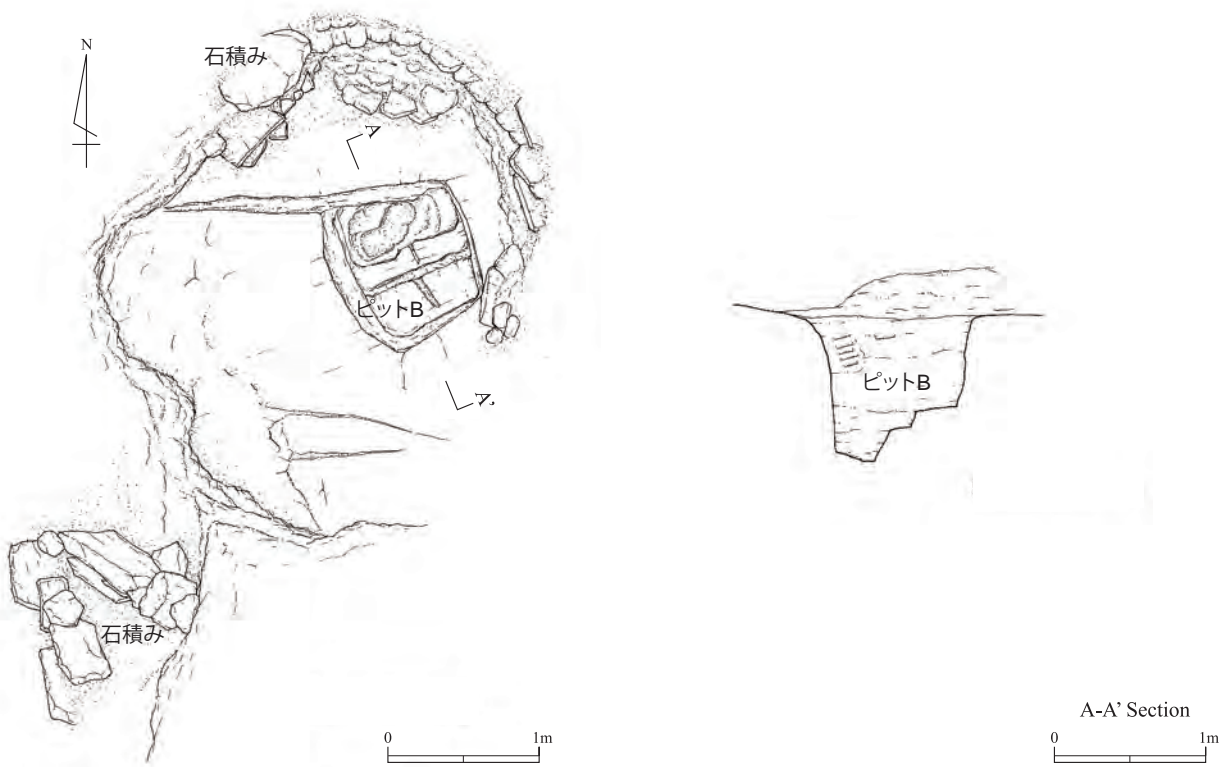


Fig.23 ピットB 平面図、断面図

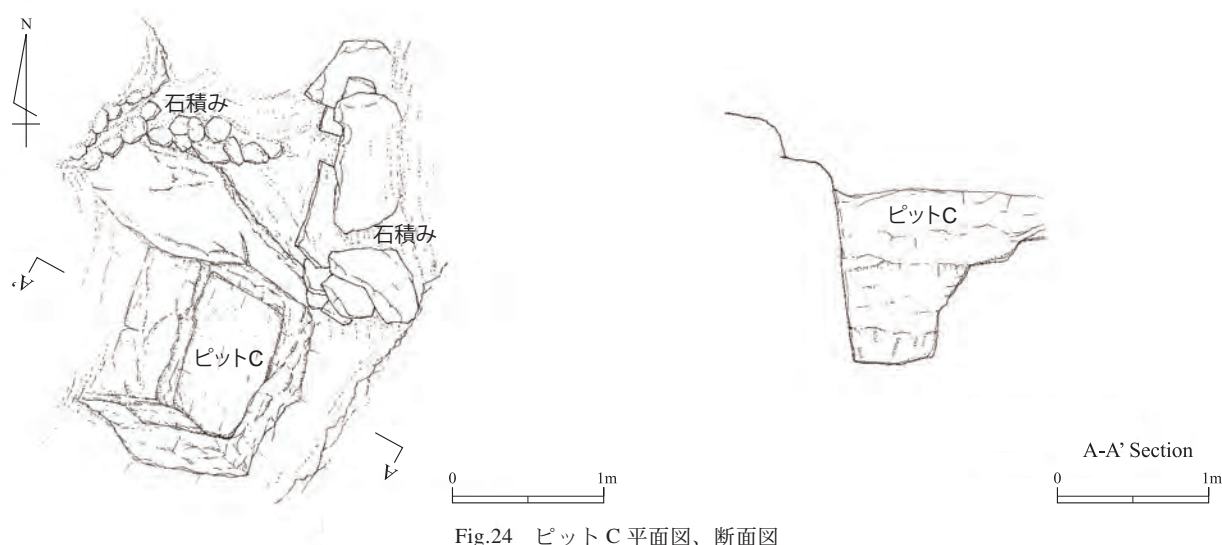


Fig.24 ピットC 平面図、断面図

(4) 出土遺物

出土遺物については、丘陵南東斜面と、南東地区に分けて記述する。

①丘陵南東斜面

1) 土器³⁾

丘陵の南東斜面は、3層に分層されており、その最下層にあたる黄色細砂層から、瓶形土器が原位置で出土した (Fig.25.1)。類例は、ヘラクレオポリス (Bader 2009: Fig.11.e) など、古王国時代後期の遺跡に求めることが出来る。その他、黄色細砂層からは壺形土器が発見されており (Fig.25.2)、こちらも類例を古王国時代後期の遺跡に求めることが出来る (Rzeuska 2006: Pls.13, 14)。これまでアブ・シール南丘陵遺跡の西側斜面 (吉村他 2007: 55, Fig.23.1; 2008: 64, Fig.18.4-6)、石積み遺構南側 (吉村他 2006: 27-28, Fig.9.1-3; 2007: 36, Fig.10.1) から、古王国時代後期の土器が出土しており、当遺跡において古王国時代後期に何らかの活動があったと考えられてきた⁴⁾。同様に、今期出土した土器も、これらの活動に関連すると考えられる。

また、上層の黄色砂礫層^②では、3箇所、土器が集中した状態で出土した。主なものは、完形に復原された短頸壺形土器 (Fig.25.3)、長頸壺形土器 (Fig.25.4) である。短頸壺形土器は、Nile B2 胎土で、外面にはクリーム色のスリップが塗布されているほか、胴部に紐の痕跡が見られる。類例はこれまでアブ・シール南丘陵遺跡で出土しているほか (高橋 2008: Figs.34.9, 43.1)、ルクソール西岸のトトメス4世の葬祭殿 (Guidotti and Silvano 2003: no.141) など、第18王朝中期の遺跡に求めることができる。

長頸壺形土器は、Marl A4 胎土で、頸部には3本の沈線が見られ、また焼成後にマークが刻まれていた。マークは2つあり、ひとつはウアス、もうひとつは、4本もしくは5本の縦線が確認できるものの、マークの部分が削られており、詳細は不明である。胴部には赤色の顔料が付着しており、更に数か所、意図的な破壊の痕跡も見られることから、何らかの儀式に使用された後に廃棄されたと考えられる⁵⁾。長頸壺形土器の類例は、これまでアブ・シール南丘陵遺跡で出土しているほか (高橋 2008: Figs.36-38, 41)、ルクソール西岸のトトメス4世の葬祭殿 (Guidotti and Silvano 2003: nos.143-145)、トトメス4世時代のチャヌニ墓 (Brack and Brack 1977: Taf.46.e, 63.1/14) などに見られる。

出土状況や類例などから、これまでアブ・シール南丘陵遺跡の斜面から発見された土器のように、アメンへ

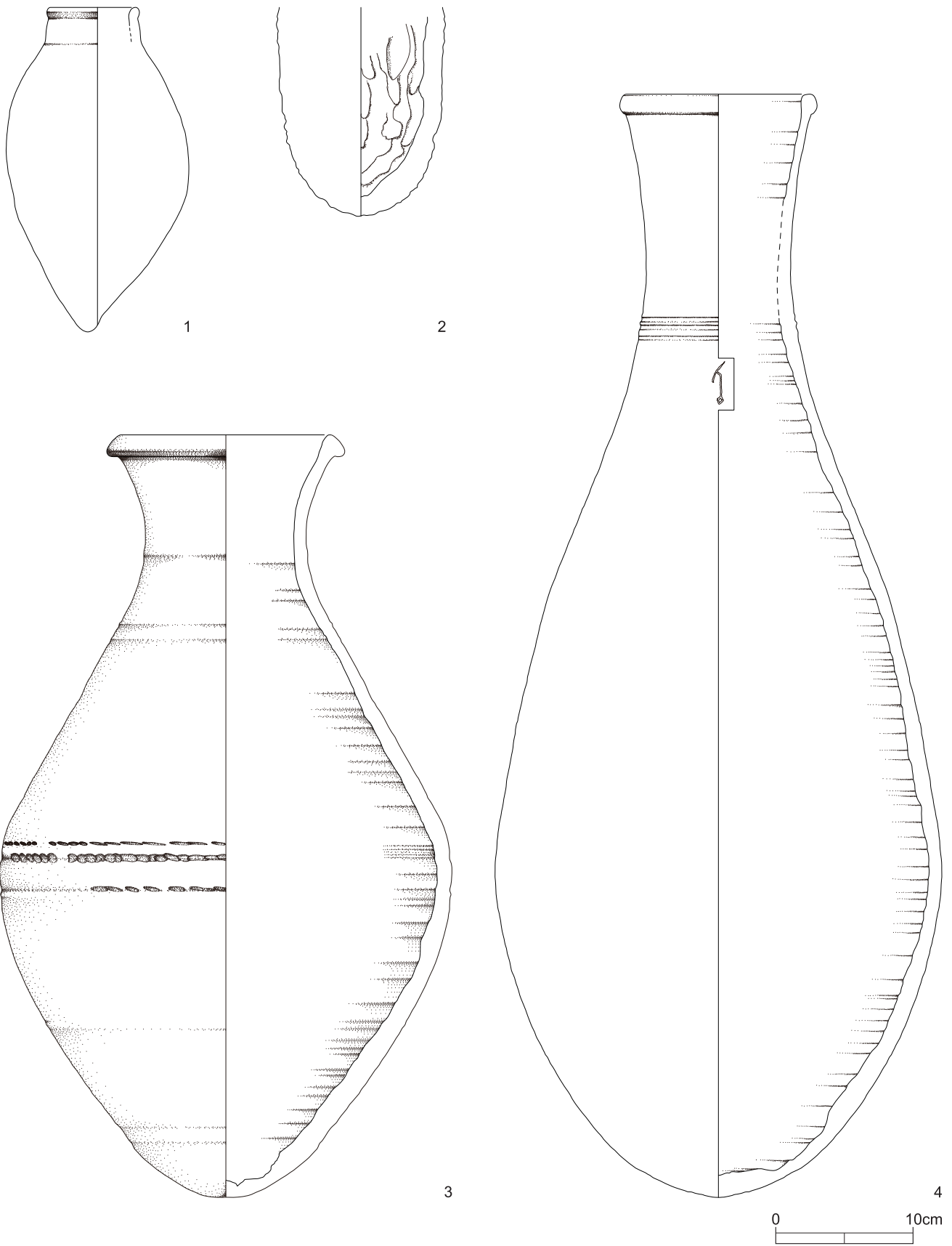


Fig.25 丘陵南東斜面出土遺物 (1)

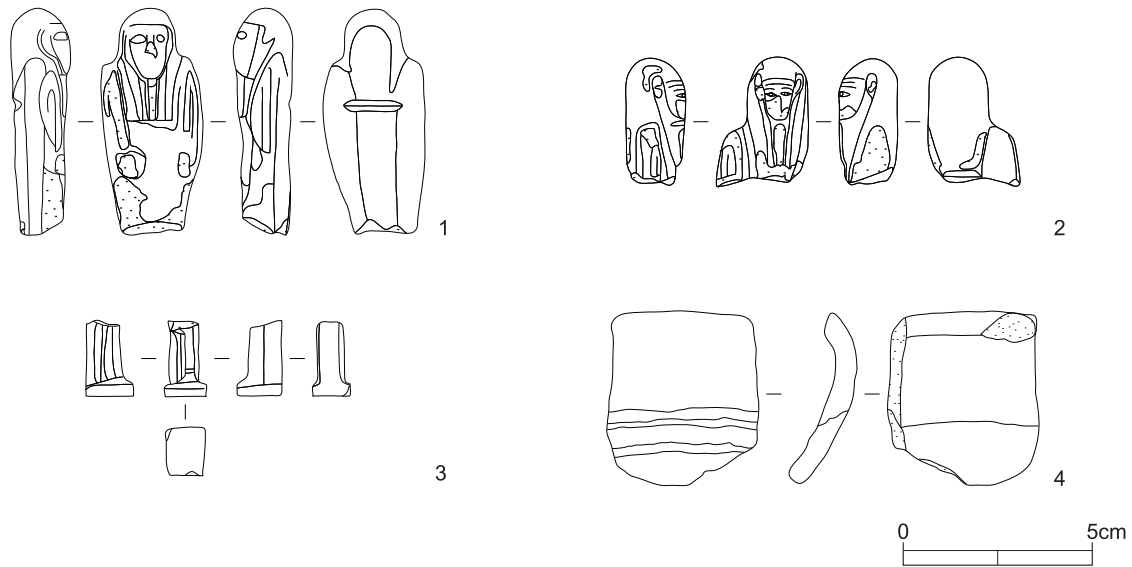


Fig.26 丘陵南東斜面出土遺物 (2)

テプ2世とトトメス4世の日乾燥瓦遺構における祭祀に使用された後に、斜面の上から廃棄されたものと考えられる。発掘調査区は、日乾燥瓦遺構からやや離れた位置にあるが、当時の活動域を示す資料として重要である。

2) シャブティ

末期王朝時代のミイラ型のファイアンス製シャブティが2点出土した (Figs.26.1, 2)。1点は、腰から上のみ残存しており、飾りおよび沈線のないカツラと付け髭を身につけている。手には鋤と鍬をもっており、背中には何も背負っていない。もう1点は胸から上のみ残存しており、額に二重線のあるカツラをかぶっている。鍬を持っていることは確認できるが、両手部分が失われているためどちらの手で持っているかは確認できない。これら2点は異なるタイプではあるが、いずれも末期王朝時代第27～28王朝頃のものと思われる (Schneider 1977: 5.3.1.193)。なお、シャブティの出土はアブ・シール南丘陵遺跡では極めて珍しく、これまでに発見されたものはわずかに2点である (吉村他 2007: 41, Fig.13.1, Pl.10.1)。いずれも末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代づけられている (吉村他 2006: 31, Fig.11.3)。

3) アミュレット

ファイアンス製アミュレットの脚部分の破片が出土した (Fig.26.3)。上部が失われているためモチーフは不明であるが、左足を前にした姿勢から、アブ・シール南丘陵遺跡から既に出土しているトト神やアヌビス神などの神々との類似が指摘できる (早稲田大学エジプト学研究所編 2001: Pl.15.4)。

4) 石製容器

エジプト・アラバスター (方解石) 製の石製容器の口縁の一部が出土した (Fig.26.4)。直径 28.5cm 程度の浅鉢で、アラバスターの天然の色調変化により、上下が白と茶の2色に分かれている。

5) 植物遺存体

丘陵南斜面からは、植物遺存体の出土が顕著にみられた。特にキリストノイバラが多く、出土場所は谷状になった発掘区の東半の両脇に集中する。キリストイバラは、供物としても、日常の食用としても食される植

物であるが、この丘陵での祭祀またはそれに従事した者達の食事に起因する可能性が考えられる (Darby et al. 1977: 702-703)。

②南東地区

1) 土器

丘陵の南東地区の発掘調査では、最下層にあたる灰色砂層から、いわゆる「ビール壺」と呼ばれる壺形土器の破片が2点、出土した。土器片は、Nile B2 胎土 (Fig.27.1) と Marl A2 胎土 (Fig.27.2) である。いずれの土器片の類例も、古王国時代第4王朝初期に年代付けられるダハシュールのネチュル・アペレフのマスタバ墓 (Alexanian 1999: Abb.55.M52, 57.M89) などから出土している。上層の黄色細砂層からは、壺形土器片が出土しており (Fig.27.3)、類例は、末期王朝時代に見られる (French 1986: Fig.9.17)。

南東地区では、土器も含め、出土遺物が少なく、また年代の参考となるような文字資料も出土していない。こうした状況の中で、限られた資料ではあるが、これまでのところ両者の土器がこの区域における活動の年代の上限と下限を示す資料として注目される。

2) 石灰岩製石板

板状の石灰岩の両面に刻線が刻まれたもので、4つの破片が出土した。これら4点は1つに接合される (Fig.27.5)。接合された状態でのサイズは22.5cm×52.7cm、刻線により表4×15、裏4×17のマス目が設けられている。線が刻まれた表面とその他の面の一部は整形されている。刻線はフリーハンドで刻まれ、途中で刻み直されている場合も見受けられる。また短辺の一方には段差があり、段差の手前で線は終わっている。そのほかの辺では線は終わっておらず、続きがあるように考えられる。

このような柁目を刻んだ石板は、通常ゲーム盤として知られている。古代エジプトで一般的に盤上ゲームとして知られているセネトゲームはマス目が30 (3×10) か20 (3×4) であり (Decker 1987: 124-131)、この石盤はセネトゲームのゲーム盤とは異なるが、セネトゲーム以外のゲーム盤も出土していることから (cf. Raven et al. 2001: 64, Pl.46.Cat.362)、この石板もゲーム盤であった可能性が高いと考えられる。

3) ファイアンス製品

南東地区の発掘区Bの黄色細砂層および灰色砂層から、ファイアンス製品片が8点出土した。いずれも小片であり、製品の全容を明らかにすることはできない。ターコイズ・ブルーの釉薬が使用されており、表面はやや銀化している。また胎土は緻密で不純物が少ない。このような特徴をもつファイアンス製品は、アブ・シール南丘陵西側斜面からも出土しており、同一包含層からは末期王朝時代のファイアンス製シャブティの出土が認められている (吉村他 2007: 37-41)。したがって、今回出土したファイアンス製品の小片も同様に、末期王朝時代に年代づけられると考えられる。

4) カルトナージュ片

発掘区Bの北西、黄色細砂層から計5点のカルトナージュ片が出土した。いずれも5cm以下の小片であり、火を受け一部が炭化している。彩色も残っておらず、年代等は不明である。

(5) まとめと今後の課題

第22次調査では、丘陵頂部、丘陵南東斜面、南東地区において地中レーダー探査による異常応答の確認を

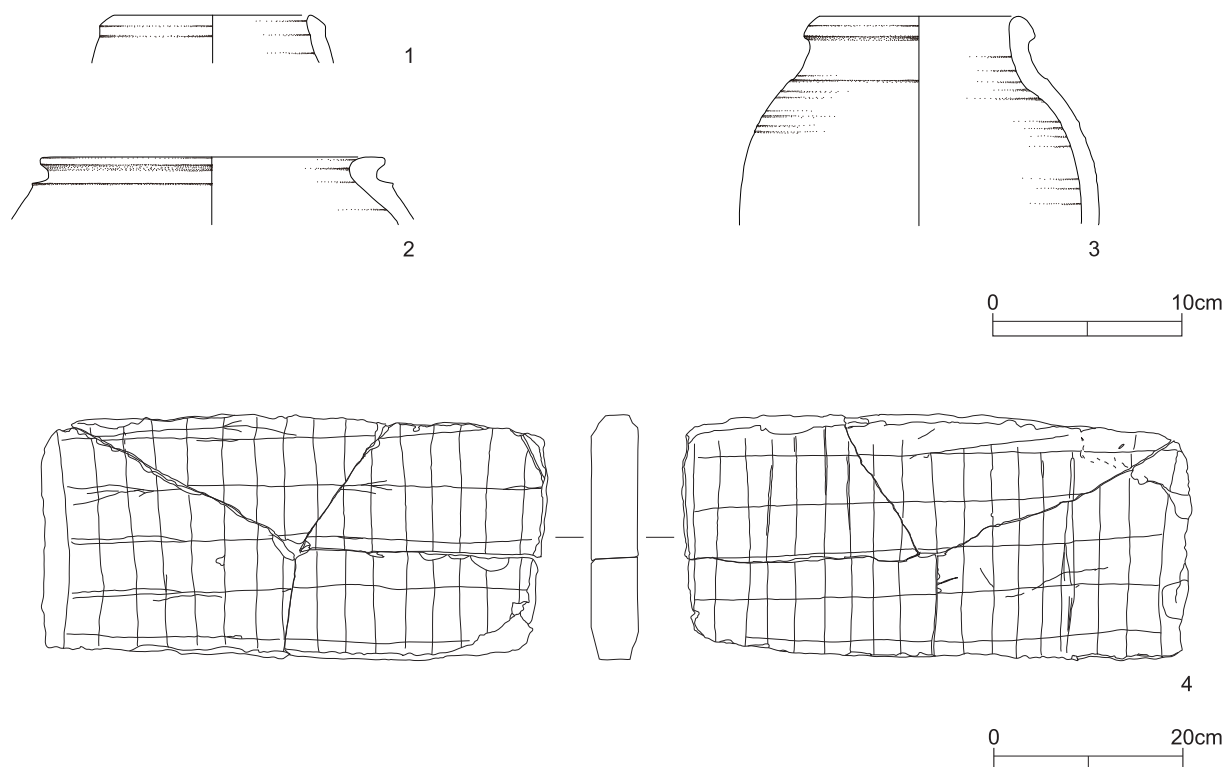


Fig.27 南東地区出土遺物

主たる目的として発掘調査を行った。

発掘調査の結果、丘陵の南東斜面では、地中レーダー探査による異常応答は自然地形によるものと判断されたものの、これまでの斜面の発掘調査で見られたように、丘陵における古王国時代、新王国時代、末期王朝時代の活動に関連する新たな資料が得られた。

また、丘陵から東南東の方角、約450mの場所に位置する南東地区では、発掘区Aと発掘区Bの2か所で調査を行い、発掘区Aではシャフト、発掘区Bでは3つのピットを発見した。

発掘区Aのシャフトは、深さが3.3mあり、底は作業が途中で放棄された様相を呈している。シャフトは地上から約2mの深さにおいて南西に横穴が穿たれており、横穴は、埋葬の痕跡を示す遺物などは出土していないものの、形状やシャフトに残る痕跡などから埋葬室として意図されたと考えられる。シャフトは横穴が掘込まれた部分から更に1.1m垂直に掘込まれており、シャフトの壁面の鑿痕の違いなどから、2回にわたってシャフトが掘削されたと判断された。ただし、これが既に存在したシャフトを再利用した結果によるものなのか、あるいは一連の工程であったのかは判断することはできなかった。シャフトの周辺には、自然堆積の黄色細砂を挟んで、2層のタフラ層が円環状に堆積しており、またこのタフラ層を覆うように珪質砂岩片が置かれていた。これらの珪質砂岩片はいわゆる土留めとして用いられたと考えられるが、これらの珪質砂岩片にはローマ時代に特徴的な台形の楔を持つものも観察された。出土土器からは、当該地区での活動の最後は末期王朝時代に想定されるが、珪質砂岩の楔の形状から最終的な活動はローマ時代まで下る可能性が高いと考えられる。

発掘区Aの南西部では、石灰岩の岩盤が人為的に掘削され、また珪質砂岩片と炭化物を多量に含む灰色の層が岩盤直上に厚く堆積していた。この灰色の層はシャフト周辺にも堆積しており、この地区における最初の活動と位置づけられる。火熱によって珪質砂岩を砕く活動が行われた痕跡として解釈されるが、その目的については明らかではない。発掘区Aから出土した珪質砂岩片が、ゲベル・アル＝アハマルといった珪質砂岩の採石場から運ばれてきたものか、あるいは周辺の未知の珪質砂岩の採石場に由来するものかは不明であり、今後の

課題として残されている。

また、南東地区南側の発掘区 B から発見された3つのピットは、規模や深さに類似性が窺われ、互いに何らかの関係を持つ遺構であった可能性が高いが、遺構の形態からはその機能は明らかではなく、機能を示唆するような遺物も出土しなかった。

以上、南東地区からは、シャフト、大量の炭化物と珪質砂岩を含む層、3つのピットなどが発見され、当該地区にて埋葬活動や石材の運搬、加工などの活動が行われたことが推測されるが、これらが具体的にいつの時代のどのような活動によるものかは、今後の課題として残された。

(吉村作治・河合 望・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・山田綾乃)

註

- 1) 一般に珪岩と呼ばれ、英語名称では、*Quartzite* である。ただし、正確には *Silicified sandstone* と記述され、日本語では、「珪質砂岩」と訳される。エジプトにおけるこの鉱石については、Klemm and Klemm 2003 を参照。
- 2) アスワンの珪質砂岩の採石場では、石器と火熱により切り出しが行われた痕跡がみられるとのことである (Bloxam 2010: 4)。
- 3) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。その他、ウィーン・システムで未分類の胎土については、アストンらの胎土分類を参照した (Aston 2004: 196)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類 (Aston and Aston 2001: 53-54) と形態に基づく器形分類 (Holthoer 1977) を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した。
- 4) アブ・シール南丘陵遺跡において古王国時代後期に年代づけられる遺物としては、その他に岩窟遺構 (AKT01) から発見されたペピ1世の王名のある塑像などがあり (吉村他 2003: 35-41, Fig.22.3, 4, Pl.5.5; Yoshimura et al. 2005: 392-394, Fig.22.1, 2, Taf.55.d, 56.b)、出土した土器との関連性が注目される。
- 5) 同様に、意図的な破壊の痕跡が見られ、儀式に使用されたと考えられる土器は、これまでにアブ・シール南丘陵遺跡の西側斜面などから発見されている (高橋 2008)。